絶対魔眼

コルクスタンド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
絶対魔眼

【Ｎコード】
Ｎ１２６８Ｇ

【作者名】
コルクスタンド

【あらすじ】
アルウェニア暦５０７８年。惑星グランダイヤ。千年戦争が終わり数十余年、覇権は二つの国に託された。そのうちのひとつ「アセレタ」。そのアセレタの首都近郊の街サルベニスクに一軒の民間軍事運営企業（ミリタリー・カンパニー）があった。そこで社長を務めるクラス・チョーカーと社員が様々な依頼をこなしていく。

プロローグ

プロローグ

パシャッ、パシャッ。

雨の降る中、一人の少年が一台のノートパソコンを持って走っていた。端正な顔立ちをしていて、どちらかというと。中性的な感じだ。帽子を深くかぶり、ジーパンにTシャツ、ジャケットといった普通の格好をしている。が、この少年が着ると何か高級感をただよわせる。少年の数十メートル後ろを、黒づくめの男たちが追いかけている。どうやらこの少年は、この男たちから逃げているようだ。少年は狭い路地の中に逃げ込み振り切ろうとする。しかし、無情にも、少年と男たちの距離は縮んでゆく。少年は右へ、左へと曲がり、できるだけ遠くまで逃げようとする。

少年がこれで五回目になる右折をした。

――しかし、無情にもその先に道は無い。ただ、柵の向こう側に、どんよりとしたひとつの黒い川が流れていた。

黒づくめの男たちが少年に追いついた。少年は振り返り、男たちを睨みつける。

「そんなに恐い顔で睨まないでもらいたい。さあ、もう行き止まりだ。おとなしくそのノートパソコンを渡しなさい」

男たちの中の、リーダーと思われる男が言う。

「いやだと、言ったら」

まだ幼さの残る声で少年が問うた。

「君と言う存在を、抹消して、それを回収するだけだ」

男たちが少年に銃口を向ける。その目に情けの色は無い。少年が少し声をふるわせながらも、こういった。

「ずいぶん回りくどい言い方をするじゃねぇか。ようは殺すってぇことだろ」

「安心したまえ。それを素直に渡せば君に危害を加えることは無い。だからおとなしく・・・」
少年が男の声を遮るように、はっと鼻で笑う。
「死にたくねぇし、これを、渡すわけにもいかねぇんだよ」
少年が、一歩後退する。それに合わせて、男たちが銃を構える。
「交渉決裂だ」
そう言って少年は、深く暗い奈落へと落ちていった。男たちが慌てて下を覗き込む。
バシャン――
闇夜には、大きすぎる水音が響いた。

一時間後、ある街の地下水路を、先ほど川に身を投げた少年が身を引きずりながら、歩いていた。ずいぶん流されたはずだ。
「はぁ、はぁ。ここ、どこだ?うっ」
少年が足を抱えてうずくまる。川の中を泳いできたため、服はずぶぬれになっている。さっきまで気品を漂わせていたのが、うそのようだ。ここにくるまでに、何度か転んだのかあざもいくつかみられる。
「早く、早くしねぇと・・・、て・手遅れに・・なる・・前に・・・、誰かに・・・知らせ・・なきゃ・・・」
極度の疲労のためか一瞬意識が飛ぶ。少年は倒れた体を起こし、半身を壁にあずけながら進んでいく。まるで何かに取り付かれたかのように、必死に進んでゆく。何がこんなにも少年を突き動かすのだろう。口の中を切ったのか、口内に血のに味が充満している。その気持ち悪さに、つばを吐く。少しずつ休みながら歩みを進める。が、数歩歩いたところで、いきなり景色が反転した。地面に体がぶつかる衝撃がくる。自分が転んだのだと理解するまでに数秒を要し

た。

「え？う・・ぁ？」

脳に衝撃がきたのか、うまくろれつが回らない。進まなくてはいけない。けれどもうこれ以上進めない。くそっと心の中で毒づきながら、少年は襲い掛かる睡魔に意識をゆだねた。

FILE1；依頼

ＡＭ７：３０クラスは自らが社長を務める民間軍事運営企業（ミリタリーカンパニー）、ファストライドに出勤した。社長と言っても社員が社長含め六名しかいない弱小民間軍事運営企業（ミリタリーカンパニー）だ。

民間軍事運営企業（ミリタリーカンパニー）とは、文字どおり民間である一般人が、運営する軍隊、の様なものだ。先の「千年戦争」が終わり、治安が悪化したため、自分たちのことは、自分たちで守るようにと言う政府の出した、苦肉の策である。

「クラス、おはよう。珍しいじゃない、あんたが定時に出勤なんて」

「おう、おはよ」

会社の扉を開けて、最初に挨拶してきたのはリズ。クラスの幼馴染だ。

「・・・あれ？リズ、水我と水牙は、まだ来てないのか？」

「ん？ああ、あの二人。そういえば今日はまだ来てないわね」

「んだよ。いねーのかよ。せっかく今日は定時に来たってのに。あいつらが今日は遅刻してんじゃねーか、いっ！？」

急にクラスの顔が苦痛に歪んだ。通称「ＵＭＥＢＯＳＨＩ」　両の拳を、相手の頭のこめかみに当て強く挟み、拳をグリグリする。さらに攻撃力を高めるには拳を、中指のところだけ突き出した状態にするとよい。授業中寝ていると先生にやられる確率の高いわざのひとつだ。今は、リズの拳がクラスの頭にめり込んでいる。

「あのね、何かない限り、普通は定時に出勤するものなの。たまに定時に来たと思ったらろくな事言わない」

「何すんだよ、いってーだろ。それに、理由なら二日酔いだっていつも言ってんだろ」

リズの拳からクラスがすり抜ける。

「そんなのが理由になるわけないでしょ」

「ったく何で、あいつが居ない日にまで、怒られなきゃいけないんだよ」
「ソフィに、今日遅刻してきたらこってりしぼってあげてねって、言われたの」
少し自慢げに、ソフィからのメールをクラスに見せる。そこには、確かにそう書いてあった。
「だから、今日は遅刻してないだろーが」
「うるさいっ。さっさと何でもいいから、仕事を探してきなさい」
クラスはけだるそうに返事をし、渋々ながらも外回りに出かけた。

水葱が早朝の依頼を終え、会社の前まで行くとクラスが玄関先の階段に座っていた。
「よう、水葱」
「どうした。今日も遅刻か？」
「いや違う」
「はぁ？なんでだよ。遅刻しなかったときは、いつも怒られねぇじゃんか」
少し考えてから、手をぽんと打つ。
「あっ、お前またフルオート使ったろ」
「いやそうじゃなくて。今日はソフィが居ないから、リズが代わりにお目付け役をしてんだよ」
「あぁそれで、痴話喧嘩をして追い出されたってぇわけだ」
「いや、痴話じゃねーよ。痴話じゃ」
「へい、へい」
クラスからの突っ込みを交わしながら、水葱は玄関に入ろうとした。しかし、体が前に進まない。
「おい、俺を見捨てるきか？」

クラスが腕をしっかりと掴んでいた。
「しゃぁねぇな。付き合ってやるよ。んで、どこいくんだ」
「スラムのガキ共の所だ」
「はぁ？そんな所行って何すんだよ」
十分な胡散臭さを、感じながら聞いてみる。
「仕事探しさ。あいつら、いろんな所に潜り込めるだろ。結構いい情報持ってたりすんだよな」
「ガキ頼みかよ、情けねぇ」
「うるせぇ、早く来い」
ガキ頼みといわれて腹が立ったのか、クラスが声を荒げる。と、いきなりにやっとし、こっちを見て、
「まぁ、見てろって。あいつら結構やり手だぞ」

４４番街の裏路地に来てみると、そこは表通りとはまるで別の世界だ。表通りは、賑やかとまではいかないものの、商店もあり、疎らだが人通りもある。それに比べ、裏路地は凄惨な状況だった。ゴミは散乱し、ホームレスや酔っ払いが倒れている。その周りをたくさんの蝿が飛んでいる。死んでいるのかと思うと、いきなり思い出したように起き上がり、酒を呷ってまた死んだように眠る。時々、ホームレスがお恵みをと言いながら付いてくる。財布から5グラン硬貨を出して後ろに投げる。たかだかジュースが一本買える程度の金でも、ホームレスは必死にそれに群がる。どうやら、無精髭の中年の男が取ったらしい。その男は周りのものに追われながら逃げて行った。それを尻目に見つつ、歩を進める。角を曲がると、少年が仁王立ちしていた。
「マタアンタカ。キョウハナンノヨウダ」
少年が片言で聞いてきた。

「情報をもらいにきた。今日は何かあったのか、歩哨が一人足りないぞ」
「アンタニハ、カンケイノナイコトダ」
「俺はそれを聞きに来たんだ。教えてくれないか」
１０グラン硬貨を財布から出し見せる。
「ニマイタリナイ」
少年はそれだけ言うと手を差し出した。
「しょうがないな。ほらよ」
３０グランを渡すと、
「ウシロノオトコノブンモヨコセ」
と言った。
「は？３０グランで十分だろ」
「ヨコセ」
「はあ。あいよ」
もう３０グラン渡すと、付いて来いと言うように手招きして奥へと進んでいった。お前も来いと水葱に言いにそれに続く。ある程度行ったところで、先ほど水葱に言った言葉を思い出し
「な？やり手だろ？」
と言った。
「タダのガキじゃねぇか、金さえ払いや通してくれんだろ。テーマパークと何も変わらねぇじゃねぇか」
「ばーか、この俺様が６０グランだぞ？余程のことがない限り俺がそんなに金を使うと思うか」
「ふぅん。まぁただのガキじゃあねぇってことは感じ取れるが、それでもまだガキだろ？お前が金払って入るのが俺は疑問に感じる。お前なら、あんなの二、三発殴って終わりだろ？」
水葱の発言に、前を歩いている少年が反応する。
「いや、それはな……」
「おっ、クラスじゃーん」
水葱の質問に答えようとしたとき、三人の上方から声が聞こえて

きた。声をかけて来たのは、細身の青年だった。およそ、こんな所にはいそうにない雰囲気を漂わせている。しかし、着古したTシャツにジーパンという見た目とアンバランスなかっこうがそれを邪魔する。洗濯物の大量に入ったかごを抱えながら、飛び降りてきた。

「今日は、何しに来たの？いくら取られた？あっ、て言うかその後ろにいるお兄さんは水葱君かな？」

「あのなぁ、俺がここに来るのは情報を聞きに来るときだけだし、俺がいくら取られたかはあいつに聞けばわかるし、お前が水葱のこと知らない分けないし、質問したいのはこっちだから！」

「おー、すべての質問に答えてくれてありがとね。じゃあちゃんと誠意に答えないといけないよね。」

その青年は笑顔で応じた。

「お前いつもいつもこのやりとりやるけど、必要か？」

「うん。だってクラスの皮を被った悪者かも知れないでしょ？」

「ほんとにそれ関係あんのか？」

「ない」

即答かよと思いつつも、まあしょうがないかという思いも湧いてくる、不思議な青年だ。

「なぁ、クラスこいつは誰だ？俺のことも知ってるみたいだし、見た感じスラムが似合いそうな奴じゃねぇが」

そう言われて思い出した、今日は水葱もいるんだった。

「ああ、こいつは「ドーンです。いや～、あなたも大変ですねこんな上司を持って。いろいろと息子が世話を掛けるかもしれないけど、あたたかっ？」

「お前はいつから俺の母親になったんだ？それと人が話してるときに割り込んでくるな。水葱こいつは、ここのスラムを束ねてるんだ。ま、平たく言いやガキ大将だな。ここにいるガキらはみんな、裏の情報を売って生きている。ドーンはその仲買人みたいなもんだ。だからここあたりの情報は裏も表もこいつがほとんど握ってる。だから、お前の事も知ってるんだよ」

「おい、お前今ガキ大将っつたよな？ガキ大将ってなんだよ、それにここのスラムはだな……」
ドーンの説明を聞き流しつつ、今日ここに来た理由とさっきの疑問を思い出し、ドーンに質問する。
「そういえば、今日はどうしたんだ？歩哨が一人だけだったぞ。何かあったのか？」
「んー。人員削減？あっ適材適所？でも、あの子なら一人でも十分だよ」
「適材適所ってどういう事だ？」
「今日のクラスは、質問が多いね」
「はぐらかすなよ」
真面目に答えようとしないドーンに苛立ったのか、水葱が声を荒げる。
「そんな怖い顔しなくってもいいじゃない。もっと楽しく行こうよ」
「楽しいのはわかったから。それで？適材適所ってどういう事だ？」
「適材適所の意「あくまでも、適材適所の意味を言うんじゃねえぞ」
「人のボケをつぶすのは卑怯だよ。ま、いいや。教えてやるよ。昨日の朝、地下水路で男の子が倒れてたんだ。ここで、看病してるんだけど、いろいろあってね警備をそっちにまわしてるんだ」
「ふうん、そうか。まあ、それ以上は聞かないとして。何か仕事になりそうなものないか？」
その質問を待っていたかのように、ドーンの口角が上がった。
「いいのがあるよ。さっき話した男の子、今朝意識が回復したんだけど、その子が『信頼できるミリタリー・カンパニーはいないか？』って聞いてきたんだよ。どう？この話し乗る？」
このあたりの地下水路は、厳重に管理され浮浪者たちが入れないようにされている。このあたりの地下水路に入るには１５ｋｍ程は

なれた所にある橋から身投げするか、ドーンのところにある秘密通路を使うしかない。
クラスたちが頷くとドーンはじゃあ、こっち来てと言いながら、さっきまで洗濯物を干していた建物の中へ入っていった。

建物の中に入ると、大小様々な子供たちが見張りとして立っていた。その横を通り抜け、階段へ向かう。高さの少し違う階段をひたすら登り、建物の5階にきたところでドーンが、廊下の方に歩を進めた。その廊下の、奥から二番目のドアの前でドーンが止まり、こちらを向いて言った。
「ちょっとやんちゃだけど、いい子だからあまり怒らないでね」
「は！　どんなガキも、お前よりかはましだ。いいから勿体つけてねーで、早く案内しろ」
等と言っていると、その部屋から怒号が聞こえてきた。
「おいそこのお前、ミリタリーカンパニーはまだ来ないの。お前たちのボスが、連れて来ると言ってただろう。そいつに催促しろ。いいな、あと一時間のうちに連れて来い！」
部屋にいる見張りに言っているのか、確かに厄介そうだ。と思いつつその簡素な扉を軽くノックしてから、なかに入る。
「おい、何だお前。俺の部屋には勝手に入るなと、ここにいる人には伝えた筈なんだけど」
入った途端に怒号の主に説教された。しかし、
「ああ、ごめんね。こいつ、ここの奴じゃあないんだよ。だから勘弁してくれる？こいつは俺が言ってたミリタリーカンパニー、ファスト・ライドの社長。クラス・チョーカーだ。クラス、この子が信頼のおけるミリタリーカンパニーを探しているグレア・ドーマー君だ」

とドーンが取り持ってくれた。
「おい、自己紹介ぐらい俺にも出来る」
「あ、そお？」
「あ、そお？じゃない。それに、常識的に言って入ってくる時にノックぐらいするべきだろう。」
「俺はノックした。聞いてないお前が悪い」
「ノックはその目的から考えて、相手に聞こえるようにするべきだ」
説教の矛先がクラスに向きはじめた。クラスはこめかみの血管を浮き上がらせながらも、声を抑えた。
「おい、前言撤回だこいつはお前よりたちが悪い。この仕事は下りさせてもらう」
「それは俺も賛成だな」
当てにしていたクラスたちに断られそうになるのを見て、ドーンがあわてだした。
「え？いやでも、一回受けるって言ったんだしさ、男に二言はないってジャポネのことわざで言うでしょ？だからさ、頼むよ。お前たちのとこ位しか、信頼の有りそうなミリタリーカンパニーで、まともに受けてくれるとこがないんだよ」
そこまで言われたしまっては、しょうがない。まあ、このクソガキと四六時中一緒にいるわけではないし、いいか。
「しょうがないな。で、坊主仕事の内容は何だ？」
「俺の、警護を頼みたい」
「はあ？どっかの巨大な悪の組織にでも狙われてんのか？」
「まあ、そうだな」
マジかよ。地下水路で見つかったって言っていたから、やばいことに突っ込んでるんじゃないかと思ったけど、まさにそういうことかよ。待てよ？警護って言うことは、このガキンチョと・・・・・・。
「はあ。・・・・・・で、お前追われる心当たりはあんのか？」

「心当たりなら、ある。だがそれが何かは、言えない」
「そうか、じゃあ追ってくるやつに心当たりは？」
「わからない」
「ないのか？」
「いや、有りすぎる」
「だろうな。まあ、その他詳しいことはうちの事務所で聞くから付いて来い。」
「分かった」
はあ、こいつじゃあんまり報酬はあまり払えないだろうし、ソフィになんて言おう。
「ああ、そうだ。これが依頼の契約書だ、サインしてをくれ」

その契約書にクラスがサインしたそのとき、終戦後最大の事件の歯車へとクラス・チョーカーとその仲間たちは巻き込まれていった。

FILE2：ランナウェイ

クラスは水葱と共に一旦、保護対象の少年――グレアを連れて、ファスト・ライドに戻ることにした。今は会社の車で移動中だ。後部座席では水葱がグレアに聴取している。

「おい、お前ぇは一体何者なんだよ。せめてそれだけでも教えてくれねぇと、俺も困っちゃうョ？それによって、保護の仕方も変わってくんだからよぉ」

「それは……、言えねえ」

「……あー、じゃあ質問を変えよう。さっきからお前が持ってる物は何だ？」

「ノートパソコンだけど？」

そう、グレアはスラムにいたときからずっとこのノートパソコンだけを持ち歩いている。本人は、襲われる原因を隠しているが、これでは、それが何なのかを教えているようなものだ。

「そうだ、ノートパソコンだな。それは俺にもわかる。そんな見て分かるようなことを、今聞く必要があると思うか？ん？単刀直入に聴く、その中には何が入ってる？」

「それは言えねえ。ただ」

「ただ何だ？」

「親父が、これの中身を絶対に教えちゃ駄目だ。お前か、その中身を知ったやつが危険に晒される。って言ってたから。お前の為にも、言えない」

「あのなぁ、こっちは危険どころか、死すら覚悟してこの仕事やってんのよ？危険なんぞにいちいちビビッてたら、仕事できねぇんだよ。それに、お前はもう中身知ってんだろ？危険に立ち向かうなら1人より2人、3人だろ？」

「親父はそう言って中身を知ろうとするやつもいるから気をつけろって言った。第一、お前がその中身をしった途端に、敵になるか

もしれない」
「それに、依頼者のプライバシーは極力守らなくちゃいけないからな？水葱、忘れてないだろうな」
とクラスが運転席から声をかける。
「忘れちゃいねぇよ。じゃあ、そのお前の親父さんは、危険に晒せている息子をほうって、何処にいるんだ？」
「親父は、襲われたときに俺をかばって捕まった。何処にいるかは、分からない」
「そうか。お前の親父さんは、名前はなんていうんだ？」
「・・・・・・G・F。本名はいえない」
「はぁ、G・Fって誰だよ。クラス知り合いにいるかー？」
ダメ元で水葱が聞くと。
「いる」
と返ってきた。どうせ、同じイニシャルの別人だろうと思いながら聞く。
「だれだよ？」
「お前も知ってるよ。ジーニアス・フーリッシャー、フォルだよ」
その名前が出たときグレアが息を飲んだ。その様子を水葱はしっかり確認した。
「なるほどねぇ。いやでも、あいつ結婚してねぇだろ？」
「いや、7年前にガキを1人拾った、って言ってた。じゃあ、グレアお前がフォルの子供か？」
「う、・・・・・・うん。あんた、父ちゃんの知り合いなのか？」
「知り合いも何も、腐れ縁だよお前の親父とは」
その肯定の言葉を聴いて、クラスがうなだれる。
「で、お前の親父、フォルが、またなんか変なもの作ったんだろ」
「うん」
「それで、自分が思った以上にやばいもん作っちゃって、その作ったものを利用しようとする悪いやつらに追われることになったんだろ？」

「あんた、何でそこまで分かるんだ？」
グレアが少し警戒しながらクラスに聞く。
「腐れ縁だからな。それと、フォルが捕まってるらしいけど、そのままにしておこう」
「何でだよ。助けてくれよ」
「いや、あいつには少しお灸を据えたほうがいい。それに、依頼内容には人質の救出なんてなかったと思うが？」
「報酬もちゃんと出すから。頼むよ」
水葱は絶対に理由は、前者が大きいだろうなと思いながらグレアに聞く。
「お前の親父は、軍に入ってるんだからそっちが助けてくれるんじゃないのか？なんでそこまでして、俺たちに頼るんだ？」
「父ちゃんが軍とは、連絡を取るなって」
グレアの答えを聞き、水葱が緊迫した表情で言う。
「おい、お前を追ってるのって、もしかして」
「水葱、お喋りは、ここまでだ。お客さんが来たぜ」
水葱が言い終わるより早くクラスがそう告げた。水葱が見ると装甲トレーラーが前方に一台、後方には黒いバンが三台。水葱たちの車を囲むようにして走っている。いつの間にか周りの一般車はいなくなっている。
「水葱！　俺は運転中だ。お前が相手してやってくれ」
クラスがそう言ったのと同時に、水葱は車の外に飛び出した。

水葱は車から飛び出したのち華麗な着地をきめている。

バンからはスーツを着た男達が身をのりだし、短機関銃をこちらに向かってぶっぱなそうとしている。水葱は地面を軽く一蹴りし、バックステップ。地面が爆ぜ、石つぶてが窓から身を乗り出していた者達に打ち付けられる。水葱はこの時、常人では有り得ない速さでバック走をしていた。石つぶての一つが、バンのフロントガラス

にに当たり敵の視界を塞ぐ。一瞬敵の動きが鈍ったのを水葱は見逃さず、一閃。水葱の投げた苦無は音速のそれを越えていた。苦無は鎌鼬を引き連れて車の真ん中を通っ行き、車内に無数の傷跡を残す。いつの間にか、苦無は他の二台にも投げられ、水葱は後方にいたバンを一掃。高速でバックステップしながら水葱は空中で半回転。前に向き直り装甲トレーラーに追い付くためにスピードを上げる。

トレーラーの上に乗ろうとし、水葱は高々とジャンプする。トレーラーの上にいる機関銃手は、水葱が見えていないかのように動かない。先ほどのバンを一掃されたのを見て、まだ呆けているのだろうか。水葱は物理的法則に従いながら落ちて行き、その機関銃手の脳天に踵を入れようとした。そのとき、機関銃手の首がグリンとこっちを向き、凄まじい速さで水葱の脚に手を伸ばす。危機感を感じた水葱は先ほどまで従っていた物理的法則に逆らい、空中で踏み込み反転。ギリギリのところでその手を避ける。機関銃手の眼が青く光り、点滅している。それがなにかを悟った瞬間水葱は叫んだ、

「こいつ等機械人形（オートマペット）だ。爆発するぞ！」

水葱が言い終えるが早いか装甲トレーラーが爆発し、粉塵を撒き散らす。水葱は恐るべき反射神経を駆使し、跳んだ。水葱は、クラスが鮮やかなターンを決め爆発の影響から逃れた車に、滑るように乗り込んだ。保護対象であるグレアに怪我等がないかを確認し、前方に目を向け絶句する。先ほど片付けたはずのバンが、台数を増やしてこの車を囲んでいた。さらに、後ろからは機械人形が噴煙の中から現れる。恐ろしいことにこの機械人形（オートマペット）は、さっきの爆発に巻き込まれても駆動し続けていた。

「おい、クラス。こいつ等一体何なんだ？」

「型番ＨＦ－Ｚ３。人類連邦政府正規軍（ヒューマニティ・ユニオン・リーガル・フォース）の特殊工作特化型（スペシャリィムーブタイプ）機械人形だ」

「はぁ？人類連邦政府正規軍（ヒューマニティ・ユニオン・リーガル・フォース）だぁ？何でこんな最重要機密の機械人形（オートマペット）がこんな

ところに居るんだよ」
「そいつ等の狙いが」
クラスはグレアを一瞥する。
「こいつだってことだろ？」
二人が話している間に機械人形（オートマペット）達がわらわらと三人の車を囲んでゆく。
「水葱、いつも厄介事押し付けて悪いな。俺こいつ連れて一旦戻るから此処で足止めしててくれ。あとこの車、ソフィーのだから傷とかつけんなよ。じゃあな、後は頼んだ」
「おい！ちょっと待て、クラスてめぇ！」
そう言うとクラスは水葱の抗議などまるで耳をかさず、車を降りるとグレアを脇に抱え高く跳躍する。ビルの群れの中に飛び込んでいった。機械人形（オートマペット）の内三分の一ほどがクラスに反応し追いかけ様としたその刹那、超チタン合金でできているはずのボディが装備していた短機関銃ごと真っ二つに裂かれる。その腕が中を泳ぐようにかき、その胸からは潤滑油が飛び散る。青い視覚素子の光がゆっくりと消えていく。
その機械人形（オートマペット）達のレンズに最後に映っていたもの、それは右眼をエメラルドのように光らせた水葱だった。
「右眼、解放！」
水葱が、そう叫んだ瞬間その場に暴風が吹き荒れた。
「俺ぁ、今最高にムカついてんだ。仕事終わりで出勤してみたら、今度はガキのおもりだぁ？ちょうどいい、てめぇら全員撫で斬りだごらぁ！」

魔眼――この超高度文明世界においてほぼ唯一残った古来よりの力。魔眼の発現者は人口１５０億人を超えるアセレタにも、１００万人にとどくかどうかだ。その内の１人水葱は【風眼】の発現者であった。この世界にある【マター・フォース】（ＭＦ）の【水火地風電光陰】の風を自在に操る力を持つ眼、それが【風眼】である。

水葱が意識を向けた方向には数千を超える鎌鼬が生み出されている。通常の【風眼】発現者は強い風を起こしたり、良くても鎌鼬を1つや2つ作るのが限度である。なぜなら、常人より体内ＭＦ値が高い魔眼発現者でさえも、使うことの出来るマターフォースは、少ないからだ。しかし、ごく稀に体内ＭＦ値が以上に高い者がいる。

「金剛石をも切り裂く死風（しにかぜ）よ、今その力を解放す。窮奇」

水葱が目線を右から左に薙ぐと、それに1拍遅れて機械人形（オートマペット）達のボディが潤滑油を撒き散らしながらばらばらに切り刻まれてゆく。それでも、その鎌鼬を逃れた機械人形が水葱に襲いかかる。機械人形が機関銃で弾幕を張り、水葱が鎌鼬で相殺し防ぐ。その攻防が続く。水葱はそれを、打開するべく、新たに別の能力を使おうとする。

「エウロス、ゼビュロス、ノトス、ボアレース。東西南北の風、アネモイよ。その力を見せ……」

しかし、詠唱中にできた水葱の一瞬の隙、機械人形はそこをついた。絵に書いたような精緻なクロスファイアが水葱を襲う。機械人形は電子暗号を互いに超高速で受送信し、完璧なまでの連携をする。敵の生死を確認するため機械人形達は、視認野を赤外線に切り換え、敵の死亡を確認する。もうもうと上がる煙の中に一つの形が浮かび上がる。それは人の形をしているのでもなく、ましてやクロスファイアに穿たれた肉片でもなかった。それは完全な球体だった。煙の中に表面の温度が１０００度近い球がある。煙が晴れてくると見えてきた。そこには、溶解した鉛の弾丸が綺麗な球体でそこに存在していた。中から水葱の声が聞こえる。

「おぅ、てめぇら。ぬりぃんだよ。こんなもんで俺が死ぬとでも思ってるんじゃねぇだろうなぁ！」

機械人形に搭載されているＡＩは感情を持たない。が、本当にそうなら機械人形達が皆一歩後退りしたのはなぜか。

「へっ！機械人形が、びびってんじゃねぇ！」

まるで外が見えているかのような台詞と共にその球体が爆発する。機械人形達を穿ちながら、鉛の飛沫は飛散する。これ以上攻撃し続

けるのは損失と見なしたのか、破壊を免れた機械人形達が退散してゆこうとするも無残に破壊されていく。後に残ったのはもはや屑と化した人類の智の結晶と、その潤滑油であった。否、もう１つあった。

「！　おいおい、うそだろ？」

ソフィーの車が半壊していた。新車を見ながら嬉しそうにローンを組んでいたソフィーの姿を見たのは、つい１ヵ月前である。いま、出張中であることが不幸中の幸いか、と結論付けて水葱は重い足取りでＦ・Ｒ社への帰路を歩く。ソフィーへの言い訳を必死に考えながら。

今日は久しぶりに、ゆっくり出来る。とエリザベス・カーター、リズは思っていた。なぜなら、世話のやける水牙と我水は出張。お目付け役のソフィーも出張。煩い馬鹿二人も外回りに出かけている。最近はもっぱら補助回復役に借り出されて、ほとほと疲れていたのだ。

「天気もいいし、テラスで読書でもしよっかな。あ、お茶も容易しよ」

こんなにも落ち着いた静寂はいつ依頼だろう。静かなときと言えば必ず、ソフィーの無言の圧力がかかっていた気がする。

「～～～♪～♪」

自然と鼻歌をはなずさんでしまう。それくらい、今日は気分がいい。

「ん～。ほんとに気持ちいいわ。今日は外も静かだし」

遠くから弾幕を張る音が聞こえる。

「まあ、あれくらいどうってことないわよ。いつもよりかは、ぜんぜん良いわ」

銃声が大きくなる。段々こちらに近づいてきているようだ。
「まあ、クラスと水葱が居ないだけでも・・・・・・」
リズのデスクに置いてあるＡＩモバイルが音高く鳴る。
「大丈夫、大丈夫。これはきっと間違い電話」
と自分に言い聞かせながらも、リズは電話の相手が誰で何が起きているのかが、大体理解できていた。
「はい。カーターですが」
一縷の望みをかけてファミリーネームで応じる。あくまでディスプレイを見ずに。
「何ふざけてんだ？リズ、俺だ」
向こうからは激しい銃声が滞ることなく続いている。硝煙の香りがこちらまで漂ってきそうだ。
「・・・・・・うん、何？」
リズの顔に諦めの表情が浮かぶ。
「ちょっとやばい仕事請けちまった。依頼（ガキ）者の護衛なんだが、相手がやばくってな。連邦が絡んでやがる」
それを聞いたとたんリズの顔が引き締まる。連邦？何で連邦が子供を追ってるわけ？
「その子犯罪者じゃないわよね。犯罪者の護衛は規則違反になるから、カンパニー・ライセンス剥奪されちゃうよ」
「大丈夫だよ、ドーンのところで受けた依頼だ。依頼主がミリタリー・カンパニーに推測の余地を与えないほど完璧に罪を隠蔽していた場合、ミリタリー・カンパニーはその責任を問われない、だろ？それに、お前の先輩のガキだとよ」
「フォル先輩のぉ！？　とりあえず事情は後で聞くわ。私はどうする？」
「お前はビリオンをダービー通りの二丁目までまわしてくれ。必要そうな物は、揃ってるはずだ。五分後にそこで。それ（アウト）じゃっ」
急いで階段を駆け下り、ガレージにある装甲トレーラー「ビリオン」に乗り込む。全長7メートル、全高3メートル、幅4メートル

ある巨体に乗り込む。元の輪郭が分からなくなるほどがちがちに固められた装甲には、社名とロゴマークが大胆にペイントされている。隣の家の塀を大胆に削りながらリズはハントを発進させる。ここでは珍しい光景ではない。当てられるほうが悪いのだ、という精神をこの通りの方たちは持っている。リズもその1人だ。しかしこいつは違うらしい。

「リズ、塀に当てると多少なりともボディに傷がつくんだが」

そう、彼とはＡＩ搭載型装甲トレーラー「ビリオン」。天才なる馬鹿者の異名を冠するジーニアス・フーリッシャーと、我らがマッドサイエンティスト水葱の共同開発により生み出された量子コンピュータである。秒速１０億ＴＢで物事を考える彼は、その圧倒的情報処理能力の副産物としてか、人と同じような思考をもつ。

「まあ、痛くないんだから良いでしょ？」

「じゃあお前は、痛覚がないからといってその服をズタボロにされても良いのか？」

ビリオンの思考パターンは、大まかに3つに分けられそれぞれに人格がある。今日はひねくれ者で皮肉屋のハントが思考を担当しているらしい。

「本当にうるさいわね、そんなこと言うならわざとぶつけるけど、いいの？」

「俺自身の操作権限は、俺にあるんだが」

と言ってハントは勝手にリモート走行に切り替える。

「あんた、乗るたびに感じ悪くなってるわね。ああ、うちに来たときはあんなにも素直だったのに」

「ほめ言葉として受け取っておくよ」

「ふんっ」

そう言ってリズは運転をハントに任せて、愛用の中型自動式（ミディアムオート）拳銃、ベレッタのマガジンをチェックする。そうこうしているうちにダービー通りの2丁目付近に到着した。

「ねえ、ハントはこの依頼安全だと思う？」

「この業界において安全な依頼など皆無に等しいぞ？半径１００Ｋｍ以内のコンピュータ、監視カメラ、モニターを覗いてみたのだが、おそらくこれはかなり怪しい依頼だろうな。明らかに情報を隠蔽した形跡があるのだが、そこから先の足取りがなかなかつかめない。とにかく、今回の依頼人は一般人だろうが、犯罪者だろうがかなりの厄介ごとに巻き込まれてるな。人類連邦政府正規軍が絡んでるとなると、「ゼクセル」が情報管理している可能性が高い。あいつは、自分のセキュリティを越えようとする奴なんて居ないから隠蔽の事後処理が雑なんだ。まあ、俺達もあいつとはやりあいたくないがな」

さすがに超高性能の量子コンピュータであるハントも、連邦政府の極秘ファイルから、この国全ての裏側の歴史を管理し、量子コンピュータの最高峰と言われる「ゼクセル」と真正面から情報合戦をするのは、気が乗らないようだ。

「だが、統計的に見てクラスが受けた依頼のほとんどは、報償金も高いぞ？まあ、俺の創り手の関係者だから、万事解決すればそっちにたかれると思うぞ」

「あんた自分の創り手に敬意とかって無いの？まあ、あのクラス（バカ）もう契約書にサインしただろうし、今更悩んでも仕方がないけどね」

「ふっ、確かにそうだな。今、そのバカが来るぞ」

ハントがそう言い終わるやいなや、クラスが何かを抱えながら助手席に飛び込んで来た。

「いや助かった、助かった。ちょうど弾がきれちまってよ。弾装（マグ）は何処に置いてある？」

「あ、後ろに置いたままだ」

「おいおい、そういうものはちゃんと用意しとくもんだろ」

全くとかなんとか、言いながらクラスは弾薬室に消えていった。

「うぅ。機械人形達、まだまだ追って来てるけど大丈夫なのか？」

突然下の方から声が聞こえて来た。リズが下を向くと、少年がこ

ちらに2つの眼を向けていた。
「あ、あなたが依頼者の子？可愛い顔してるわね、女の子かしら」
そうリズが言うと、その子はビクッと肩を震わせ、リズを指さしながら
「なっ、そんな訳ないだろ。俺は男だよ」
「何だ、そうだったの」
「それよりも、外！機械人形達がたくさん追って来てる。どうするのさ」
「それなら、今クラスとハントが相手してるわ」
グレアが初めて聞く名に興味を持ったのか、
「ハントって誰だ？」
と聞いた。
「俺がハントだ、よろしく頼む。外の機械人形は俺に任せろ、今ハックしてる」
「うわっ。な、何？」
いきなりカーステレオから若い男性の声が聞こえてきたため、グレアは戸惑いの声をあげる。
「お前は田舎者か？今時ＡＩ搭載の車ぐらいいくらでもあるだろ」
「そんなこと言ったって、いきなり話し掛けられたら誰だって……」
などと話していたその時、クラスが対処しきれずこちらに向かって来た機械人形が新たに目標を定めリズ達に襲いかかる。１０メートル程の距離を一足飛びに、トレーラーの元にたどり着いた。機械人形は、サイドミラーを掴みながらあいた手で窓硝子を突き破ろうと、その文字通り鋼鉄の拳で勢い良く衝く。蒸気圧式加速砲を内蔵した関節から放たれたその強烈な正拳は、対戦車砲にすら耐え得るＳＧ強化硝子をに蜘蛛の巣状の亀裂を入れた。機械人形が二発目の蒸気圧式加速砲を放とうとする。しかし、その追撃は寸手のところで止まった。
「どうだ？中々にスリリングだったろう。ちょうどこいつ等のハ

ッキングが済んだ。できるだけ、車体に傷はつけたく無かったんだがな」
「あ、あんたねぇ。スリリングだったろう？じゃ無いわよ！」
リズは愛用のトカレフの安全装置を外し、窓の外に居る機械人形に照準をあわせていた。
「それにしても、あんたがハッキングに手間取るなんて。珍しいわね」
「まぁ、侵入するのは難しくなかったのだが、内部プログラムにゼクセルのセキュリティの廉価版が組み込まれていてな。さすがにいつものようにとはいかなかったな」
「いつもって。どれだけ速いんだよ」
そうなのだ、通常のＡＩではおろか、大学の研究室にあるようなスーパーコンピュータですら、軍事転用されたＡＩをハッキングするのは無理に等しいのだ。
「何だお前は、あの馬鹿の養子のくせして何も知らんのか。俺達は毎秒１０億ＴＢの思考が出来る。本来ならば一介のＡＩごとき、一瞬で配下におけるはずなのだがな。さすがにあのゼクセルの、廉価版となると少々手こずるわけさ」
「あの馬鹿の養子って。ハントは、父ちゃんに造られたコンピュータなのか？」
「そうだ」
「そうか、父ちゃんもたまにはましな物を作るんだな。そういえば、さっき俺たちって言ってたけど、どういう意味？」
そのグレアの質問にハントは答える。
「俺はビリオンという、お前の親父が作ったコンピュータの中にある三つの思考形態のうちの一つだ。まあ、人格。と言った方が分かりやすいか？」
「それじゃあ、ハント以外にもビリオンの中に人格があるってこと？」
「まあな。ああ、それを呼び出してくれなんて言うなよ。本来俺

達はビリオンの奥で眠った状態だからな。人格が生まれると、俺達情報生命体も休息が必要になるんだ」
リズとグレアが分かったのか、分からないのか、
「「ほぇ～」」
と、相槌を打つ。
「リズ。この説明をした時お前の反応が一向に変わらないは何故だ。お前と話すと肉体が無くても疲労感らしきものを感じるよ」
「それより、何で銃声がまだ聞こえるの？もうハッキングは済んだんでしょ」
「攻撃対象をクラスに限定して、機械人形に自律行動状態（オートコントロール）で襲わせて性能を測っている」

そのハントの言葉通り、クラスは３０体ほどの機械人形に取り囲まれていた。クラスの力を脅威と感じているのか、中々攻撃を仕掛けない。
と、思ったのもつかの間。クラスの前方にいた何体かが、上下左右からの同時攻撃を仕掛けてきた。まず、右側に跳ねた機械人形を銃弾で出迎え、一瞬できた時間差を利用して他の三方からの攻撃をよける。と見せかけて、その隙間に踏み込む。予測と違う行動をしてきたクラスに、機械人形が一瞬思考に時間をとられる。本来ならばそれは正しい反応であり、それ以外に方策は無いのだが、クラスには十分の隙だった。クラスの両の手から放たれたマルズフラッシュと共に、機械人形の四肢が飛ぶ。空になった右手の拳銃を、機械人形のカメラの前に放り投げる。絶妙のタイミングで放られたそれは、難を逃れた先ほど右側からの強襲を仕掛けた機械人形の動きを、一瞬封じた。身を低くし、クラスは何事か呟く。
「我、所望する。全てを貫く水砲よ。『エンキ』」
そう言い、機械人形の腹部に右手を付く。その瞬間クラスの右手から水球が放たれ、機械人形の腹部を貫き、その先にいた機械人形を破壊していった。

クラスも魔眼の、【水眼】の発現者であった。
「楽勝」
そうクラスが言ったとき横合いから拳が文字通り飛んできた。しかし、それをクラスは
「我、所望する。嫌(けん)を退ける盾よ。『ヴォジャノーイ』」
水障壁で防ぐ。
「もう、面倒くせ。もう、終わりにすんぞ。我、所望する。始祖を切り裂く鎌よ。『アープ』」
しかし、何も起きない。機械人形達はそれを好機と見たか、銃撃を開始した。３６０。全方位からの弾丸の押収。それにクラスが返したのは、剣呑な笑み。ヴォジャノーイの盾は消えているし、再発動には時間が無い。それでも彼は笑っていた。そして、死角零の銃弾はクラスを穿った。その頭を、腕を、脚を、クラスの体すべてを肉塊に変えた。機械人形のその様子を確認すると、またハントの配下に戻り動きを止めた。
「『エンキ』」
突然空から声が降ったかと思うと、音速で放たれた水球が機械人形達を撃ち抜いた。いつの間にか、クラスの肉塊は消えていた。
「どうよ、皇帝軍の最新兵器すら騙せる俺の幻術は」
クラスが、「我、所望する。始祖を切り裂く鎌よ。『アープ』」と言った時、何も起こらなかったのではない。彼は映身を使っていたのだ。しかし、今のアセレタの魔眼学では、能力を使う際にまず、今から行う事象を把握し、それを正確にイメージし、そのイメージに合った言葉を発し、正しい動作を行うことで自分の能力を具現化する、となっている。つまり、今の魔眼学ではクラスのやったことは不可能なのだ。しかし、彼は魔眼学の根底を覆すことを行いながら
「学習しながら戦略を変えるのは良いが、嘘を見抜けないのはまだまだだな。全てがセオリー通りに動くと思うなよ？」
と、言ってみせる。
「ふむ、まぁいつも通りのつまらんスタイルだな」

「それで？こいつらどうよ」
「どうとは？」
「どうって、俺と戦わせて性能を測ってるんじゃなかったのか？」
「何のことだ」
そこで、クラスにひとつの考えがよぎる。
「まさか、お前」
「やっと気が付いたか。お前が態々性能や、思考パターンを解析しやすいよう努力している姿を見るのは中々に愉快だったぞ」
「だあぁぁぁぁ！　くっっそ、騙された」
「そもそも、こいつらの性能など軍部のコンピュータをハッキングすれば造作もなく、知ることが出来るぞ？」
「俺の頑張りを返せぇ！　」

と、そんな様子を遠くから見つめる1人の赤髪（赤髪）の男がいた。長い髪をオールバックにし、一見ビジネススーツのようにも見える戦闘服（タクティカルスーツ）に身を包み。その上から竹の長い黒いオトーとを羽織っていた。そして、その端整な顔には、笑みを張り付かせている。
「へぇ、あれが『忌みの子』か。面倒くせぇ奴が付いちゃいるがまあ問題では無いな」
男が喋っていると、男の後ろに水の鎌が現れた。その鎌が、男の頭と胴を切り離そうとする。しかし、そんな状況にもかかわらず男はそのえみを崩さない。そして、
「美しく燃盛る女神よ、我を守れ。ウェスタ」
すると、男を切り裂こうとしていた鎌が炎に飲み込まれ、消えた。男はこんなものか、と呟きながらコートのポケットから少し特殊なＡＩモバイルを取り出し、電話をかける。
「『忌みの子』が、動いた。これより、作戦は最終段階へと移行

する」
そこで男は言葉を切り、今まで張り付かせていたものとは違う笑みを浮かべる。
「ゲームも大詰めだ、人間（ノーマル）どもに今までの歴史を後悔させてやれ」
と言い、ＡＩモバイルを切る。

もう、賽はすでに投げられている。立ち止まることのできないゲーム。一度はじめてしまえば振り出しに戻ることも出来ない。その先に待つのは、破滅か、それとも歓喜か。そんな、危険なゲーム。でも、始めない事も出来ない。いずれ、誰かがやる。なら、俺が歓喜への道を切り開こう。

FILE2：ランナウェイ（後書き）

更新遅くなりましたぁ。

今までこれを読んでくれたことのある皆さん、すいませんでした。これからは、もう少し更新ペースを上げたいと思います。そして、初めて読んでくださった皆さん、こんな感じですが「絶対魔眼（アブソルート・マギアイズ）」よろしくお願いします。

では、また次話でお会いしましょう。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1268g/

絶対魔眼

2010年10月10日22時45分発行